

平和を愛する遺伝子は人類の DNA に組み込まれている

民族や文化の異なる人と人との平和共存の前途は険しい。人類史の書をひもとけば、異なる民族間の戦争が絶えなかったことは歴然としている。文明が進んだ 21 世紀の世界でも、人間の心の奥に残る人類の生存闘争に起因する戦争が頻発している。縄張り争いや種を残すための闘いは人類を含む動物の本能なのだろう。

しかし、その一方で平和を愛する遺伝子が人類の DNA に組み込まれていることも事実である。山あり谷ありの困難の道であるが、人類の叡智で恒久の世界平和を成し遂げる希望が全く持てないというわけではないと考える。

一般論をいえば、自らの民族と文化に誇りを持たない国民は異なる民族と文化に寛容になれない。外国人はそのような国民に敬意を表さない。

日本が移民の受け入れで成功をおさめるには、日本人と他の民族が互いの立場を尊重し合って生きる社会、すなわち多民族共生社会をつくる必要がある。

そのとき日本人に求められるのは、日本人としてのアイデンティティを確認するとともに、異なる民族を対等の存在と認めることである。日本民族の根本精神を堅持するとともに、ほかの民族の固有文化を尊重しなければならない。

世界の民族が移住したいと思う国は、日本人が日本人としての誇りを持ち、移民が移民としての誇りを持てる社会である。

わたしは、移民国家日本の究極の目標として、人類共同体社会の樹立を掲げている。千年前から日本列島に住んでいる日本人と、21 世紀に世界各国から移住してきた移民とが日本国民として一つにまとまる社会の創成だ。

世界の民族は、大なり小なり「エスノセントリズム」(民族的自己中心主義)の考えを持っている。しかし、今の日本人には自分たちが最も優秀な民族という民族的優越感はほとんど見られない。世界の主要民族のなかで日本人は謙虚な民族の部類に入るのはないか。

それに加えて、日本人は古来、人類はもとより動物・植物・鉱物を含む万物平等思想をいだいている。地球上に存在するあらゆる人種・民族に甲乙はないと考える日本人は、地球上のすべてのひとびとが永遠の平和をエンジョイする世界を築けるのではないかと想像をたくましくする。

私の親友に敬虔なイスラム教徒がいる。27 年前に難民として日本に来たパキスタン人である。いま、東日本大震災の被災地に家族ともども移住し、支援活動に熱心に取り組んでいる。彼は多数の被災者の尊敬を集めている。

そのパキスタン人は坂中の移民革命思想の信奉者である。2013 年 2 月、彼を激励す

るため宮城県の被災地を訪れた際に、彼は私の人類共同体思想の世界史的意義を強調した。そのうえで、それは「アニミズムの世界観が根底にある坂中さんのユニークな発想のたまもの」と評価し、坂中構想の実現の可能性に言及した。

〈坂中さんの人類共同体構想は世界平和に貢献する。神の加護があるので近未来の地球社会で人類共同体社会が実現している。坂中さんは世界の救世主になる。〉

信仰心の厚いイスラム教徒が真剣な顔で「坂中英徳は世界の救世主」と熱弁を振るうのを聞いてびっくりした。異国の神の助けがあって百年後には坂中構想が具体化しており、世界平和が現実のものになっているという。

在日パキスタン人の予言が適中するかどうかは不透明であるが、世界平和を願う心が人種・民族・宗教の別なくすべての人々のDNAに備わっていることは確かなようだ。

人類社会に純粋民族は存在しない

世界の多士済々が永住を希望する国に生まれ変わらなければ日本の明日はない。人口減少期に入った日本は、先祖代々の日本人だけで国家・社会・経済を運営する時代は終わった。

日本の文化が外国人観光客をひきつけるのは、日本文化が世界各国の文化の精髓を取り入れた雑種文化の典型だからである。言語、料理、宗教、社会規範など、日本文化は世界のどの民族も理解可能な普遍的なものである。仮に全然まじりけのない純粋文化だったとしたら、外国人観光客はそんな日本文化に共感を覚えないだろう。

およそ人類社会においてほかの民族の血がまったく混じっていない純血民族など存在しない。人類の祖先に最も近いとされる黒人の中にもいない。人類史は移動と定住の歴史であり、いっぽうで人類は異なる民族間の結婚と混血を繰り返し、様々な文化を背負った多様な民族と国民に分かれた。

今日、地球上に存在する民族のすべては移民の末裔であり雑種民族である。日本では1000年以上移民鎖国体制が続いたので日本人は純血度の高い民族だが、それでも太古の昔から世界各地から移住してきた民族の血がまじりあって形成された雑種民族であることに変わりない。

1000年後の人類社会を展望すると、地球上から地理的・国家的・文化的障壁は完全になくなり、異民族間の結婚と混血が世界的規模で爆発的に増えた結果、人類の大半が人種的に単一のものになっているだろう。すなわちそれは単一の種から進化した人類の先祖返りであり、究極の雑種民族といえる地球人の誕生である。

なぜ移民は日本文化のとりこになるのか

入管の行政官として、退官後は移民政策研究所の所長として、様々な国籍の外国人と接

した経験から、日本という小宇宙には外国人を日本にひきつけ、外国人を日本に同化させる不思議な力があると感じている。一体どのようにして日本は外国人をひきつける魔力を身につけたのだろうか。なぜ在日外国人は日本文化のとりこになるのだろうか。

日本は古来、「人の和」や「寛容の心」を重んじる精神風土をはぐくんできた。多神教の日本人の心の奥底には多様な価値観や存在を受け入れる「寛容」の遺伝子が脈々と受け継がれてきた。長い歴史を経て外国人が日本に溶け込む同化力の強い社会が形成されたのだと思う。

知り合いの在日外国人は、信義を守る日本人、もてなしの心がある日本人、穏やかな人柄の日本人に敬愛の念を持っている。四季があって変化に富む自然、美しい田園風景、まとまりのある社会、安全な社会を気に入っている。アニメもファッションも料理も大好きだという。日本の文化に憧れる外国人観光客も増加の一途をたどっている。

移民の二世以降の世代が日本の小中学校で学び、出身国や民族による差別のない社会で成長していけば、生まれ育った日本に愛着を覚え、日本人と心が解け合うだろうと見ている。また、世界のどの民族もいまだ成功していない多民族共同体の樹立も視野に入ってくるだろうと考えている。

最近、私の移民国家構想について多様な国籍の在日外国人と意見交換をしている。彼らは口をそろえていう。「寛容の心がある日本人は移民を上手に受け入れる」「日本人と移民が協力して多民族共同体を創成できる」。

そして、私の提唱する人類共同体思想——文化と価値観を共有する人類が和の精神で一つになる地球共同体論への熱烈な支持を語る。在日外国人の世界で移民待望論が見られる。

移民国家・人類共同体・世界平和

平成の日本は、日本の歴史にも世界の歴史にも前例のない「人口ピラミッドの崩壊」という一大危機にある。未曾有の危機を脱するのに生半可な改革をいくらやってもだめだ。今の日本に何よりも必要なのは国の形と国民の生き方を根本的に改める革命である。

千年に一回の移民革命を行う覚悟が国民に求められる。千年以上続く移民鎖国体制をひっくり返し、人口崩壊に伴う全面崩壊の危機を乗り切るのだ。

日本で永住を希望する世界の若者に移民の地位(将来の国民)を与え、移民に対する教育を熱心に行って新しい国民に育て上げ、人口ピラミッドを正常な形に立て直すのだ。

人口秩序の回復には百年を超える時間がかかる。それは日本人の内なる敵との闘いでもある。国民は体内にしみこんだ島国根性を克服し、移民を人類同胞として温かく迎える地球人に成長しなければならない。

日本文化史が雄弁に物語るように、日本人は外国の文化や宗教を寛容の精神で受けとめて自分のものにしてきた。日本文化は、日本人が世界の文化の精髓を取り入れて洗練されたものに磨き上げた雑種文化の優等生である。移民の受け入れも、和の心を持ち、尊大な

ところが少ない日本人なら成功に導けると考えている。

究極の目標は人類共同体社会の形成である。それは言葉の真の意味での世界平和への第一歩となる。日本人がそれを成し遂げれば、人類の相互依存関係が進む近未来の地球人への最高のプレゼントになるだろう。

以上のような移民国家の理想像と恒久的世界平和の夢を描いた新作が、『新版 日本型移民国家への道』（東信堂刊）と、英文図書『Japan as a Nation for Immigrants』（移民政策研究所刊）である。この二つ著作の刊行が契機となって移民国家議論が一気に盛り上がることを切望している。

移民国家ジャパンは人類共同体と世界平和の達成を目ざす

私が唱える人類共同体の理念は人口危機の日本の生き残りがかかる移民政策というだけでない。地球上の諸民族の融和ひいては戦争のない世界を目ざす平和哲学でもある。

近年、世界の慧眼の士が坂中英徳の移民政策論に関心を寄せている。なかでも移民政策と人類共同体の創成と世界平和の実現を一体のものとして関係づけて論じている箇所が目まぐるしく集まっているようだ。

新著の「日本の移民国家ビジョン——人類共同体の創成に挑む」（『新版 日本型移民国家への道』（東信堂、2014年）所収の論文）のなかで、次のような仮説を立てた。

〈日本の移民政策は、人口危機に瀕した日本を再生させる国家政策にとどまらない。地球上の諸民族が和の心で平和共存する世界を希求する世界政策でもある。日本の移民革命思想は、日本のみならず世界各国に根本的変革を迫り、すべての民族の共存共栄と世界平和に貢献し、国境を越えて人類の一体化が進むグローバル時代に生きる地球人への最高の贈物になるだろう。〉

地球規模での恒久平和の実現は夢のまた夢の段階にある。だが、民族・宗教対立の激化による世界戦争の脅威が現実味を帯びている今日、日本人が祖先から引き継いだ和の精神から生まれた人類共同体思想と世界平和哲学を世界に向けて発信したことは大きな意味があったと思う。

日本精神の根底には万物平等思想がインプットされている。八百万の神々を受け入れ、地球上に存在するすべての人種・民族はみな平等と考える日本人は、世界の先頭を切って、すべての民族が和の心で平和共存する小宇宙を築けるのではないかと考えている。

わたしは日本人の立てた移民国家理念が世界平和を牽引する夢を追い求める。近未来のいつの日か、日本の豊かな精神風土の産物である移民革命思想が世界の人々を平和に導く星として世界に煌く時代がくることを願っている。

太平洋共同体の夢

平成の開国の本命は「移民」というのが世界の常識である。国際社会は、日本が移民に門戸を開かないかぎり、ほんとうに国を開いたことにはならないと冷静に見ている。

平成の開国劇において TPP への加入は序幕にすぎない。内閣の移民国家宣言で終幕を迎える。

TPP の次の課題は移民開国である。これは日本の百年の計であるとともに、日本の生き残りがかかる国家戦略である。

明治の開国は、西洋文明を積極的に取り入れた「文明開国」であった。戦後の昭和の開国は、貿易、資本自由化を行った「経済開国」であった。今まさに国民的課題に浮上した平成の開国は、人口危機におちいった瀕死の日本を元気にする「移民開国」である。日本が最後まで拒み続けてきた「人の開国」だ。

移民開国はすなわち移民革命である。究極の日本改革の引き金になる。日本人の生き方から社会・経済・教育制度にいたるすべての根本的変革を迫るものとなる。

日本が移民立国を国是とする国になると、人の移動・外交・経済・安全保障の分野で移民送り出し国との関係強化が進む。移民外交が日本外交の柱の一つになる。

わたしは、国際約束に基づき看護師・介護福祉士などを移民として計画的に受け入れる体制を早急に確立し、環太平洋経済圏の一員になること、それしか日本の生きる道はないと考えている。環太平洋地域には、米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど、世界の移民大国が顔をそろえている。

日本が TPP に加入するとともに、50年かけて移民1000万人を計画的に入れる「移民大国」の道を歩めば、移民立国の理念を共有する主要国が環太平洋地域に集結する移民国家連合が形成される。それだけにとどまらない。加盟国の間で人の移動が激しくなり、しだいに一体感が醸成され、人類の夢である「太平洋共同体への道」が開かれるかもしれない。

安倍晋三首相にお願いがある。日本が TPP への参加を決定する時に移民国家の名乗りをあげ、日本は米国など移民先進国と連携して環太平洋地域における人の移動の拡大と世界平和に貢献することを世界にアピールしていただきたい。

米国は日本の移民大国への転換を期待している

2010年2月、ワシントンポスト紙のリー・ホックスタッダー論説委員(当時)が、「日本の移民受け入れに対する姿勢、態度の変化」のテーマで取材を行うために私を訪ねてきた。同紙の取材を受けるのは2007年12月と2009年1月に続いて三度目である。米国の代表的なクオリティーペーパーは、2009年1月23日の一面で「日本の人材育成型移民政策は革命的」と世界に発信するなど日本の移民政策に寄せる関心は並々ならぬものがあつた。

ワシントンポストの論説委員は「日本型移民国家の構想」(2009年、移民政策研究所

刊)の英語版(Towards a Japanese-style Immigration Nation)を読んでおり、中身の濃い議論ができた。米国は「日本の移民大国への転換」を期待しているのではないかと私が尋ねると、彼はにっこり笑った。イエスともいわなかったがノーともいわなかった。

2時間の取材が終わって意気投合した。私が見送ったとき、彼は『Lonely Battle』で「すね。がんばってください」と述べて強く握手した。

ワシントンポストの一連の取材と報道を通して、アメリカは日本の移民開国を望んでいると理解した。だからワシントンポスト紙は、私の立てた移民国家ビジョンを破格の扱いで世界に紹介するのだと思った。

米国政府は、アジアで最も信頼する同盟国の日本が、人口危機の問題に適切な手を打たず、国際社会における存在感を急速に失っていくのは、アメリカの世界戦略上も好ましくないと考えているのではないか。いや、もっとポジティブな思惑があるのではないか。日本がアメリカと国家理念を共有する移民国家の仲間入りをし、日米の絆がさらに強固なものに発展することを望んでいるのではないか。

そのときそのような仮説が浮かんだ。その後も、ウォール・ストリート・ジャーナル、AP 通信などアメリカを代表するメディアが坂中移民国家論を好意的に報道する状況が続いているので、当時の私の見方はおおむね正解だったのではないかと思っている。近いうちにそれは事実によって証明されることになるだろう。

八分までの未完の人生

わたしは1975年の在日朝鮮人政策の立案をもって移民政策の嚆矢とし、それ以後、40年間、移民政策一本槍の人生を歩んだ。誰もが恐れをなしてさわろうとしなかった移民国家大綱の立案に全精力を傾けた。四面楚歌と一人旅が続く中、自らを叱咤激励して移民国家の根本原理の究明に心血を注いだ。

その間、切れ目なく移民政策論文を書き続けた。移民政策研究の白眉といえるのが、2014年に出た『新版 日本型移民国家への道』(東信堂)である。そしてこの5月、世界の世論が移民国家ジャパンの誕生に期待を寄せる契機となればと願って、英文の移民政策論文集『Japan as a Nation for Immigrants』を発行した。すでに坂中移民国家論は海外で高く評価されているので、この雄渾なる英文は世界の知識人に衝撃を与えるだろう。

最近、親しい英国人ジャーナリストから、「革命的な移民国家構想を公言している坂中さんに官邸から圧力がかからないのですか」と聞かれた。私は「四面楚歌の状態に置かれていることに変わりはないが、永田町から坂中構想に対する批判、圧力は一切ない」と答えた。彼は「日本は自由にもものが言えるいい国ですね」と述べた。

日本政府は危険な思想家の唱える移民革命思想を放任するというか、敬して遠ざけるというか、いずれにしる傍観者の立場に終始した。政治が私の移民国家構想に干渉することはなかった。それが幸いした。自分のやりたいことを自由にやることができた。その結果、

世界の移民政策研究者がミスターイミグレーションと認める移民政策研究の第一人者になった。

私の使命は移民国家理論の完成で終わらない。移民国家の建国という大業が残っている。国家百年の偉業を達成すれば坂中移民国家論は有終の美を飾れるが、国事に奔走する私にとってそれは私事だ。大事の前の小事にすぎない。それに、何もかもうまくゆく人生は私の性に合わない。

20代の時分から、いい事づくめの人生などこの世に存在しないという人生観を抱いていた。70代の今も、よい事とそうでない事とが半々で終焉を迎えるのがあるべき人生だと思っている。理路整然とした論文のような人生などあり得ない。仮にあったとしても、そんな完璧な人生は心の葛藤も人間味も達成感もない。およそおもしろみに欠ける人生だ。

画竜点睛を欠く未完の人生に憧れる。職業人生において有言実行をモットーに生きてきたが、人類未踏の移民国家の創成については未完成交響曲で終わるのがいいと考えている。移民国家の指針となる理論体系の基礎を築き、八分までの困難の仕事を成し遂げたから、それで責任は果たした。移民国家日本の完成は近未来の地球人にゆだねる。